

電信柱と妙な男

小川未明

青空文庫

ある町まちに一人ひとりの妙な男みようおとこが住すんでいた。昼間ひるまはちつとも外そとに出でない。
友人ゆうじんが誘さそいにくても、けっして外そとへは出でなかつた。病びよう氣き
だとか、用事ようじがあるとかいつて、出でずにへやの中なかへ閉とじこもつて
いた。夜よるになつて人ひとが寝静ねしずまつてから、独ひとりでぶらぶら外そとを歩あるく
のが好すきであつた。

いつも夜よるの一時じごろから三時じごろの、だれも通とおらない町まちの中なかを、
独ひとりでぶらぶらと歩あるくのが好すきであつた。ある夜よ、おとこ
のようしずに静しずかな寝静ねしずまつた町まちの往來おうらいを歩あるいていると、雲突くもつくば
かりの大おお男おとこが、あちらからのそりのそりと歩あるいてきた。見上みあ
げると二、三丈じようもあるかと思おもうような大おお男おとこである。

「おまえはだれか？」と、妙な男は聞いた。

「おれは電信柱だ。」と、雲突くばかりの大男は、腰を

かがめて小声でいった。

「ああ、電信柱か、なんでいまごろ歩くのだ。」と、妙な男

は聞いた。

電信柱はいうに、昼間は人通りがしげくて、俺みたいな

大きなものが歩けないから、いまごろいつも散歩するのに定めて

いる、と答えた。

「しかし、小男さん。おまえさんは、なぜ、いまごろ歩くのだ

。」と、電信柱は聞いた。

妙な男はいうに、俺は世の中の人がみんなきらいだ。だれとも

顔を合わせるのがいやだから、いま時分歩くのだ。と答えた。それはおもしろい。これから友だちになろうじやありませんかと、
 電信柱は申し出た。妙な男は、すぐさま承諾していうに、
 「電信柱さん、世間の人はみんなきらいでも、おまえさんは好きだ。これからいつしよに散歩しよう。」といって、二人はとも
 もに歩き出した。

しばらくすると、妙な男は、小言をいい出した。

「電信柱さん、あんまりおまえは丈が高すぎる。これでは話
 しづらくて困るじやないか。なんとか、もすこし丈の低くなる工
 夫はないかね。」といった。

電信柱は、しきりに頭をかしげていたが、

「じゃ、しかたがない。どこか池か河のふちへいきましよう。私は水の中へ入って歩くと、おまえさんとちようど丈の高さがおりあうから、そうしよう。」といった。

「なるほど、おもしろい。」といって、妙な男は考えていたが、「だめだ。だめだ。河ぶちなんかいけない。道が悪くて、やぶがたくさんあつて困る。おまえさんは無神経も同然だからいいが、私は困る。」と、顔をしかめて不賛成をとなえだした。

電信柱は、背を二重にして腰をかがめていたが、

「そんなら、いいことが思いあたった。おまえさんは身体が小さいから、どうだね、町の屋根を歩いたら、私は、こうやって軒について歩くから。」といった。

「みようおとこ 妙な男は、だま 黙つてうなずいていたが、

「うん、それはおもしろそうじゃ、わたし 私を抱いて屋根の上へのせてくれ。」

と頼たのみました。

でんしんばしら

電信柱は、かろがろ 軽々と妙な男を抱だき上げて、ひよいとかわら

やね 屋根の上うえに下おろしました。妙な男は、ああなんともいえぬいい景け

しき 色よろこだと喜んで、やね 屋根を伝つたつて話はなしながら歩あるきました。するとこの

とき、くもま 雲間から月つきが出て、おたがいに顔かおと顔かおとがはつきりとわか

りました。みようおとこ 妙な男は大きな声こえで、

「やあ、おまえさんの顔かおいろ色は真まつ青さおじゃ。まあ、その傷きずぐち口は

どうしたのだ。」と、でんしんばしら 電信柱の顔かおを見てびっくりしました。

このとき、電信柱がいうのに、

「ときどき怖ろしい電気が通ると、私の顔色は真っ青になるのだ。みんなこの傷口は針線であつた。」といひました。

すると、妙な男は急に逃げ出して、

「やあ、危険！ 危険！ おまえさんにや触れない。」といったが、高い屋根に上がつていて下りられなかつた。

「おい小男さん、もう夜が明けるよ。」と、電信柱がいつた。

「え、夜が明ける？ ……」といつて、妙な男は東の空を見ると、はや白々と夜が明けかけた。

「こりやたいへんだ。」といいざま、でんしんばしら電信柱に飛びつこうと
して、またあわてて、

「や、危険きけん！ 危険きけん！」と、後あとじさりをすると、でんしんばしら電信柱は手
をたたいて、ははははと大口おおぐち開けて笑わらった。

「小男こおとこさん、私わたしは、こうやっていられない。夜よが明あけて人ひとが通とお
る時じ分ぶんには、旧もとのところへ帰かえって立たつていなければならぬのだ。
おまえさんは、独ひとりこの屋根やねにいる気きかね。」と、でんしんばしら電信柱は
いった。

みようおとこ妙な男は困こまつて、とうとう泣なき出だした。かれこれするうちに、
人ひとが通とおり始はじめた。でんしんばしら電信柱は、とうとう帰かえる時じ刻こくを後おくれてしま
つて、やむをえず、とてつもないところに突つつ立たつて、なに知しら

ぬ顔かおでいた。妙な男みようおとこは独り、

「おい、おい、電信柱でんしんぼしらさん、どうか下ろしてくれ。」と拝おがみながらいったが、もう電信柱でんしんぼしらは、声こえも出さなけりや、身動みうごきもせんで、じつとして黙だまっていた。通とおる人々ひとびとは、みんな笑わらつて、「こりや不思議ふしぎだ、あんな町まちの真まん中なかに電信柱でんしんぼしらが一本立ほんたつてゐる。そして、あの屋根やねにゐる男おとこが、しきりと泣なきながら拝おがんでゐる。」

といて、あつはははと笑わらつてゐると、そのうちに巡査じゆんさがくる。さつそく妙な男みようおとこは、盗賊とうぞくとまちがえられて警察けいさつへ連つれられていきましたが、まったくの盗賊とうぞくでないことがわかつて、放免ほうめんされました。それからというものは、妙な男みようおとこは夜も外へ出でなくな

つて、ひる昼もよる夜もへやに閉とじこもっていました。そして、その電でんし
信んぼ柱しらも、いろいろ世間せけんでうわさがたつて、もう夜よるの散歩さんぽはや
めたということでもあります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 Ⅰ」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

※表題は底本では、「電信柱《でんしんばしら》と妙《みよう》
な男《おとこ》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

電信柱と妙な男

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>